

# 遣唐使の母の祈り

旅人の 宿りせむ野に 霜降らば  
わが子羽ぐくめ 天の鶴群たづむら

(巻九一七九一)

遣唐使が野宿する野に霜が降るならば我が子に羽を覆ってやって天飛ぶ鶴の群れよ

この歌は、子の無事を願う遣唐使の母の祈りを鶴群(『万葉集』では鶴の歌語は「タヅ」)への願いとして表現した、強く心をうつ歌である。題詞には「天平五年癸酉の年に遣唐使の船が難波の港を出発」した時に贈った歌とある。長歌は「一人子が唐へ旅発つというので、竹珠たけたまを沢山貫いた玉飾りを垂らし、神聖な甕かみに木綿を付けて垂らして、潔斎けつさいして私が無事を祈る子よ、どうぞ無事であっておくれ」(巻九一七九〇)という内容で、やはり子の無事を祈る母の祈りが凝縮されている。天平五年の遣唐使は従四位上多治比真人まこと広成を正使とし、船四艘で四月三日に難波港を出港した。総勢は帰国の時、崑崙国こんろんこくに漂着して九十余人が惨殺された副使の第三船の乗員一一人か

らすると、約四六〇人程度になる。ただし宋の『冊府元龜』は五九〇人とする。この遣唐使船は翌年の朝賀の式を目指して娜の津(博多)を経、五島列島沿いに西進し、福江島の三井楽の崎から唐に向けて東シナ海に乗りだした。なんとか蘇州に漂着し、さらに西安に向って遙かな旅を続けたものの、入京できたのは翌年四月になってからであった。遣唐使の母は想像もつかない苛酷な旅程を想い、野宿のときに霜の降るようなことがあれば羽を覆って守ってやってほしいとの願いを鶴群に訴える形で表現している。これはしかるべ



鶴居村を飛ぶツル

き教養ある女性で、自慢の息子を慈しみ育てていた母ゆえになしえた歎きの表現なのであろう。  
遣唐正使は、帰路、吉備真備を伴い、天平六年十一月二十日に多祢嶋に着き、天平七年三月に朝廷に詣でている。副使は一度は南国崑崙国に漂着して乗組員を多く失い、二度目は北の渤海国に漂着し、ここから出羽国に戻っている。母のためには子の第一・二船での無事の帰国を願うばかりであるが、第四船と子の消息に触れるものは何もない。歌碑は福江島の三井楽の柏崎先端、北海道釧路市の鶴居村鶴センター等

建っている。  
(万葉古代学研究所所長・寺川眞知夫)